

フィンランド公立図書館における移民対象 イベントの成立要件

— エスポー市立図書館で開催されている
各種イベントに着目して —

The Requirements for Events Targeting Immigrants at a Public Library in Finland: Focusing on the Classes and Events Held at Entresse Library in Espoo

大 谷 杏

OTANI Kyo

Abstract

This article considers the requirements that enable a public library to implement events for immigrants by analyzing the outcomes of participant observation and interview with the librarians at Entresse Library in Espoo, Finland. As a result, some factors; employment of foreign citizens as librarians, cooperation with civic associations, facilities for enjoying music and eating, and introduction of the latest equipment, are thought to be necessary for public libraries to function as the learning institutions for immigrants.

はじめに

日本では、中長期的に定住する在留外国人が年々増加しており、その数は2016年6月現在で約230万人を超えた¹。このような状況の下で、定住後の彼らの生活を支える教育機会の提供方法について今後一層検討していく必要があると考えられる。学齢期にある子どもの場合は学校内で日本語指導が実施されているが、成人に関しては地域の日本語教室に自ら積極的に出向かなくてはならない。日本語教室の多くは現在、公立小学校の空き教室や公民館等で行われているが、参加者のアクセスやボランティアの確保など課題もいくつか見受けられる。それらに対処し、また、移民が言語以外の催しにも参加しやすい環境を作るには、身近で誰にでもアクセスし易い公共施設である公立図書館を活用するという方向も一つに考えることができる。本論文では、日本と同時期の1990年代以降に定住外国人が急増し、彼らを対象としたイベント (tapahtumat) を多数開催しているフィンランドの公立図書館に着目する。

先行研究を紐解いてみると、公立図書館が生涯学習に大きく貢献し得る可能性を秘めて

いると指摘し、サービス拡大の一例として在住外国人の存在を挙げたのは山口源治郎であった²。彼は、日本において公共図書館が生涯学習に果たす役割のひとつとして、支配的な言語と民族文化への同化ではなく、異なる言語と文化の承認と理解を基本にしたサービスの必要性を論じている。公共図書館の移民に対するサービスに関する先行研究には、スウェーデンを研究対象とした深井³、小林ソーデルマン・吉田・和気⁴、デンマークを対象とした吉田⁵、和気⁶、ノルウェーに焦点を当てたマグヌスセン矢部・吉田・和気⁷など北欧に関するものが多いが、フィンランドの図書館における移民サービスについては手薄な領域であった。移民研究以外のフィンランドの公共図書館全般に関する研究に目を向けると、久野が同国の公立図書館の「出会いの場」「交流の場」としての役割⁸、西川はその施設や構造にそれぞれ着目している⁹。また、図書館が情報教育の場として活かされていることを見出した大橋¹⁰、千葉¹¹、桂¹²による論考もある。2012年8月にヘルシンキで開催された世界図書館情報会議「第78回 IFLA 年次大会」前後の『図書館雑誌』誌上における特集には、水野¹³、福田¹⁴、家城¹⁵、三浦¹⁶、山田¹⁷による同国内の図書館の現地報告が記されており、その中で山田はインフォーマルな形で外国語会話を楽しむヘルシンキ市パシラ図書館のランゲージ・カフェに一部言及し、司書によってカフェが行われている点が大切であると述べている。フィンランドにおいて、公共施設である図書館が定住外国人向けにランゲージ・カフェを提供しているという取り組みに焦点が当てられたのである。2014年、同国の難民と移民の定住支援策の調査のためフィンランドを訪れた筆者も、ランゲージ・カフェを国内で初めて開設したこのパシラ図書館にて職員に対し、インタビュー調査を実施した。

本論文では、公共施設である公立図書館をイベント開催により移民の学びの場として生かしていくという観点から、その実現に必要と考えられる要件を探ることを目的とする。そして、多文化政策に特に力を注いでいるエスポー市立エントレッセ図書館 (Entressen Kirjasto) を例に、1か月間に館内で行われるイベントの開催状況やその参与観察結果を分析し、運営面、施設面から必要となる要件を検討したい。現地調査は、2016年3月22日(8時15分～12時30分)、エントレッセ図書館にて、ロシア語話者を対象とした講座「ロシア語による初心者のためのコンピューターとインターネットの使い方クラス」への参与観察と図書館職員への英語、日本語によるインタビューという形で実施した。特にインタビュー調査と館内見学は、参与観察に先立ち、8時15分から11時までの間に館内で行った。インタビュー対象者は、エントレッセ図書館の特別司書である Jasmin Lappalainen 氏と日本人職員である Aki Sakata-Henttonen 氏 (以下、坂田職員) である。

本論文は3節から成る。第1節では、当館で1か月間に行われている全イベントの開催状況を、第2節では、上記講座の参与観察結果をそれぞれ記す。第3節では、第1節と第2節の結果を、イベントの企画、運営方法やその主体等 (運営面)、イベントの開催を可能とする図書館内の設備 (施設面) の2点から分析し、公立図書館を移民・難民の生涯学習のために活用していくために必要な要件を抽出していきたい。

第1節 エントレッセ図書館におけるイベントの開催状況

1. ヘルメット (HelMet) 圏内の図書館におけるイベントの開催状況

ヘルメット (HelMet) とは、Helsinki Metropolitan Area Libraries という英語名の略で、ヘルシンキ、エスポー、カウニアイネン、ヴァンターというフィンランドの首都圏の4つの市から成る市立図書館のネットワークである。現在、このヘルメット圏内には63館の図書館があり、計約900人の専門職員が働いている。図書館システムの共有、図書館カードの相互利用、異なる自治体間における相互貸し出しが可能である他、職員向けの訓練コースの実施、各種キャンペーン、顧客調査等でも協力関係を築いている¹⁸。

ヘルメットの各図書館では、利用者向けに多くの講座やイベント (tapahtumat) が開催されており、その数は全館の合計でインターネット上に掲載されているものだけでも、1か月間 (9月1日～30日) で912件に上る。市別の内訳で見ると、ヘルシンキ市が426 (人口628,208人¹⁹)、エスポー市が328 (269,802人)、ヴァンター市が136 (214,605人)、カウニアイネン市 (9,486人) が9である。毎週開催の講座や催しであるイベントも回毎にそれぞれ掲載されていることから、種類別で見るとこの数よりも少なくなる。しかし、多文化関連のものをはじめ、タイトルからしても特色のある講座や催しが多く開催されている。なお、これらの事前告知は図書館内に掲示される他、ヘルメットのホームページ上にも掲載される。

2. エスポー市立エントレッセ図書館

エントレッセ図書館は、エスポー市内の中心地のひとつであるエスポー駅前のショッピングセンター内に立地している。本論文で当館を事例として選定したのには、外国人住民が多いという地域の特性上、同館が2009年に多文化サービスに重点を置いた図書館として開館した点を挙げることができる。そのため、外国人職員の積極的雇用を義務付けた独自の方針を持っている。現在、図書館では50名の職員が働いており、そのうち22名が正規職員である。そして、正規職員のうち、5名が移民 (ソマリア3名、コソボ、ブルガリア各1名) である。フィンランド人職員と外国からの移民としてフィンランドへやってきた図書館職員の間には、正規や有期雇用等の職種別以外特に区分けはない。また、図書館内に多文化専門の部署が設けられている訳ではなく、部署は「子ども」など大まかな分類で分けられている。また、有期雇用の職員の中には、トレイニーという立場で短期間職業訓練を行う人々がおり、フィンランド語に困難を抱える移民も含まれているとのことである²⁰。とりわけエントレッセ図書館周辺にソマリア人が多く住んでおり、図書館においても彼らが助けを必要としているため、ソマリア人職員が多く雇われている。他にも現時点で有期雇用の職員の中には、イタリア、日本、ロシア、ルーマニア、ラトビア、インド、ペルシャの出身者がおり、過去には中国やナイジェリア出身者も勤務していた²¹。そのような多文化への取り組みが評価され、エントレッセ図書館は2015年に国の教育・文化省からフィンランド賞を受賞している²²。

図書館のあるエスポー市は首都ヘルシンキに隣接する国内第2の都市である。市内にはエントレッセ図書館があるエスポーセンター (Espoo Centre)、レップパバーラ (Leppä

vaara)、タピオラ (Tapiola)、マティンキュラーオラリ (Matinkylä-Olari)、エスプーンラハティ (Espoonlahti) という5つの中心地がある²³。筆者はタピオラからレップパバーラまで路線バスで移動したが、その間、建設中の道路や建物を多く目にした。このような建設ラッシュにも表れているように、エスポー市の人口は1980年代以降増え続けており、今後増加が見込まれている²⁴。

エスポー市では総人口と共に、外国人人口とその割合も増加している。2000年にはフィンランド国籍者が人口の96.8%、外国籍者が3.2%であったが、2014年の統計では、フィンランド国籍91.4%、外国籍8.6%となっており、エスポー市全体の人口が増加の一途を辿っていることを考えると、外国人人口も急速に増加していると考えられる²⁵。それに伴い、外国語を母語とする人々の増加、即ち言語の多様化も進んでいる。2000年には市の全人口の3.8%が外国語（公用語であるフィンランド語、若しくはスウェーデン語以外の言語）話者であるとされていたが、2014年にはそのパーセンテージが12.2%にまで上昇している。フィンランド全土で5.4%が外国語話者である²⁶ことを考えると、エスポー市の外国語話者の割合は国内でも非常に高い値であると言えよう。市内では実に130以上の言語が話されていると見られており²⁷、特に多い言語には、エストニア語（全住民の2.1%、5,452人）、ロシア語（2%、5,335人）、英語（0.9%、2,363人）、ソマリ語（0.8%、2,175人）、中国語（0.8%、2,015人）がある²⁸。また、エスポー市の近年の傾向として、同市に住む難民の増加を挙げることができる。認定前の庇護者も多く住んでおり、彼らは人口の中に含まれていないため、市内にはここで言及した以上に多くの外国人が暮らし、多様な言語が話されていると考えられる²⁹。

3. エントレッセ図書館で開催されているイベント（2016年9月1日～30日）

ここでは、エントレッセ図書館で1か月間に行われている、イベントの名称、対象者、開催曜日、時間、頻度、場所、使用言語、主催団体等の概要を整理する。なお、ここで扱う告知は、全てヘルメットのホームページ上に掲載された情報に基づいている。告知の詳細は巻末資料として掲載し、図書館主催ではなく市民団体等の主催の場合に限り、どのような団体が開催しているのかを補足的に説明した。なお、告知やそれに関する情報はフィンランド語のページを参照したが、その中には英語、スウェーデン語、エストニア語、ロシア語で書かれたものも含まれている。

参与観察やインタビューを行った3月のものではなく最新のものを調査対象とした。その理由として、4月以降に行われたヘルメットのホームページのレイアウトの更新により、インターネット上に掲載されていたイベントに関する情報がいくらか削除されてしまったことが挙げられる。したがって、より正確な開催件数やイベントの全体像を把握するためには、2016年9月期、すなわち現在進行中のイベントに関する情報を収集するのが適切であると考えたためである。2016年9月12日、21時50分時点で掲載があったものに限定した。

それによると、エントレッセ図書館の2016年9月開催のイベントは24種類であった。項目別に分析すると、表1の通りとなる。対象者については重複している箇所もあるが、「母親」と「赤ちゃん」など「女性」と「子ども」両方に該当するものについては双方に丸印を付けた。また、頻度は毎週開催のものを「毎」、隔週は「隔」、単発的と断定できるもの

表1 エントレッセ図書館で開催されているイベント（2016年9月1～30日）³⁰

イベント名	対象者							曜日	頻度	開始時刻	場所	言語	主催
	移民	子ども	男性	女性	高齢者	家族	限定無し						
エンター・アソシエーションによるシニアのためのITピアサポート会					○			木	毎	12:00		フィ	民
MLL 家族カフェ							○	金	毎	10:00	ジュ	フィ	民
早起さんの週刊ニュース							○	月	毎	9:00		フィ	民
ステージダンス							○	火	隔	11:00	ジュ	フィ	民
手工芸クラブ							○	火	隔	17:00		フィ	民
エントレッセ図書館ランゲージ・カフェ	○							火	毎	17:30	ジュ	フィ	民
フィンランド語によるおはなし会		○						水	毎	10:00	お	フィ	民
一緒に読もうー女性のためのフィンランド語学習グループ	○			○				水	毎	10:15	ブ	フィ	民
親父のためのタンバリンクラブ			○					木	毎	16:00	ジュ	フィ	民
SPR 宿題クラブ	○	○						水	毎	17:00	ブ	フィ	民
女子のためのキャンディ・カフェ				○				金	毎	14:00	ジュ	フィ	民・市
母親と赤ちゃんのためのエストニア語によるグループ	○	○		○				月	毎	13:00	お	エ	市
スウェーデン語によるおはなし会		○						火	隔	9:30	お	ス	民
ダンスの会							○	火	毎	11:00	ジュ	フィ	
おりがみワークショップ							○	火	隔	17:30		フィ	民
瞑想の会							○	土		17:30	ジュ	フィ	
ロシア語による初心者のためのコンピューターとインターネットの使い方クラス	○							火	毎	11:00	会	ロ	民
病気の人や愛する日の記憶のためのワークショップシリーズ							○	月	シ	13:00	ジュ	フィ	民
ビートルズ回想							○	木	単	18:00	ジュ	フィ	民
インターナショナル・ストーリーカフェ	○							土	単	14:00	エ	英	民
ムクスキノ		○						月	月1	10:00	ブ	フィ	民
イタリア料理ワークショップ							○	月		17:00	ジュ	フィ	民
イタリアサッカーのお話							○	水	単	18:00	エ	フィ	民
イタリアのタベとナボリの音楽							○	火	単	18:00	エ	フィ	民

については「単」とし、開催頻度が不明なものに関しては空欄とした。場所は、ジュークボックスを「ジュ」、おはなしの部屋を「お」、ブルールームを「ブ」、エストラーディを「エ」、会議室を「会」とした。言語は、フィンランド語によるものを「フィ」、エストニア語で開催されるものを「エ」、スウェーデン語を「ス」、ロシア語を「ロ」、英語を「英」としてある。主催は図書館によるものを「民」、市民組織、民間団体によるものを「民」、図書館以外の市の部局が関わっているものを「市」とした。

この表から、それぞれの項目ごとに以下の点を読み取れる。初めに、対象者に関して言えば、参加者を限定しないイベントが半数程度を占めているが、移民を対象としたイベント数が全体の25%（6つ）に上っていることにも注目する必要がある。また、そのうちの2つは移民たちの母語である外国語（エストニア語、ロシア語）や英語で開催されている。その他の対象者については、子どもを対象としたものが次に多く、女性、家族、男性と高齢者がそれに続く。次に曜日であるが、「インターナショナル・ストーリーカフェ」を除く全てが平日開催となっている。その中でも全イベントの3分の1に相当する8イベントが火曜日に開かれている。開催頻度については、半数に相当する12のイベントが毎週開催されている。隔週開催が4つ、月1回開催が1つあることから、単発的なものよりも定期的に行われるイベントが多い。開始時刻は、午前開催が9、正午開催が1、13時以降の午後開催が4、16時以降の夕方開催が7、18時以降の夜間開催が3となっている。夜間開催は全て単発的なイベントであるが、その他に関しては午前と夕方に集中している。フィンランドの図書館はシフト制を採っているため、職員もあらゆる時間に対応することができる。館内における開催場所は記載があるもののみ記したが、ジュークボックスが9、エストラーディ4、ブルールーム、おはなしの部屋がそれぞれ3であり、半数近くの

イベントがジュークボックスで開催されている。主催団体については特定できるもののみ記したが、5イベントが市民組織や民間団体により開催されているものであり、民間と市の共催、民間と図書館の共催や市の図書館以外の部局によるイベントも1つずつ見られた。

エントレッセ図書館では、2016年1年で634のイベントに18,683人の参加があったという(集計中)。なお、これら図書館で開催されるイベントは図書館主催、民間主催に限らず全て参加無料である。フィンランドの公共図書館は、図書館法(Kirjastolaki)に基づき、全てのサービスを基本無料としている。エスポー市立図書館において費用が必要とされるのは、2枚目以降の図書館カード(紛失時など、大人3€、子ども2€)、図書返却の遅延料金(大人のみ20c/日)、図書弁償費、紙袋(40c)、図書館相互貸借サービス、SMSサービス利用時のみである。市民組織や民間団体による会議室やジュークボックスの使用も基本的には無料であるが、一般企業等ビジネスを含む内容を伴う場合は図書館長が別途判断している³¹。

第2節 ロシア語による初心者のためのコンピューターとインターネットの使い方クラスにおける参与観察

1. 調査とクラスの概要

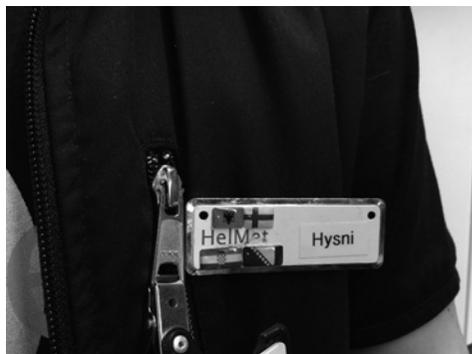
前節のイベントのうち、フィンランドでは外国語であるロシア語での開催イベントという点に着目し、「ロシア語による初心者のためのコンピューターとインターネットの使い方クラス」において参与観察を実施した。観察したクラスは、2016年3月22日の11時から12時30分までの間、エントレッセ図書館の中の会議室で開催された。クラスに携わる図書館職員は、ロシア語講師であるIrina Golysheva氏(エスポー市職員、以下イリーナ先生)、Olga Bykova氏(オルガ職員)、Alexandra氏(アレクサンドラ職員)である。

当クラスは2010年に開始された、1年完結講座である。フィンランドに住むロシア語話者の参加を想定して作られた。前述した通り、市にはロシア語を母語としている人が人口の2%に当たる5,335人暮らしている。フィンランドにはロシア人が多く住んでいるが、その理由のひとつとして里帰り移民であるインゲル・フィン人の存在を挙げることができる。彼らは、17世紀に当時スウェーデンであったフィンランドからイングリア地域(現在のロシアのサンクトペテルブルクやエストニアのあたり)に移住した人たちの末裔で、1990年代以降、ソ連崩壊やフィンランド国内の労働力人口確保に伴う帰国政策により約25,000人が帰国したと見られている³²。したがって、近年のエストニアとロシアからの移民の中にはこれらの人びとが含まれている可能性がある。

インゲル・フィン人が何人参加しているのかは定かでないが、コンピュータークラスの参加者は全員ロシア語話者である。観察日当日の参加者は女性4名:Tさん(在フィンランド25年)、Nさん(11年)、Aさん(10年)、Bさん(10年)であった。彼女たちはフィンランド語も理解できるが、年配者であるため、母語であるロシア語の方が理解しやすいという。普段は5~6人、多い時は10~12人が参加することもある。教えるのは、市の正規職員であるイリーナ先生(在フィンランド10年)一人で、普段は同じ市内のセロ図書館



〔写真1〕



〔写真2〕

をメインに教えている。参加者からの質問が多いクラスなので、有期雇用のロシア人であるオルガ職員（在フィンランド4年）とアレクサンドラ職員（在フィンランド7年）がサポートに入っている〔写真1〕。

2. 授業内容

授業は、欠席の人に関する話や来るべきイースター・ホリデーについての話題から始まった。参与観察者である私に配慮して、先生は参加者にグーグルマップを開くように指示し、それを頼りに、参加者やイリーナ先生、職員であるオルガ職員とアレクサンドラ職員、筆者も含めそれぞれの出身地を1カ所ずつ地図上で確認していった。先生用のパソコンはプロジェクターで前方にその内容が大きく表示されるため、参加者は進捗状況を確認することができる。

その後、本題として、イースター期間中のスーパーマーケットの開店時間についてインターネットで各自調べるといった課題が与えられた。イリーナ先生の指示通りにSマートのホームページを検索し、イースター期間中の営業時間を確認する。そして、指名された参加者がフィンランド語で書かれたホームページの内容をロシア語に訳すというのが毎回の基本的な流れとなる。検索途中で操作方法が分からなくなった参加者が相次いで挙手し、オルガ職員とアレクサンドラ職員はその対応に追われる。ロシア語で行われるクラスであるが、参加者の生活と直接かかわりのある身近なフィンランド国内の情報検索を行うため、ロシア語のページを教材とすることができないのが難点であるという。

営業時間の検索が一通り終了したところで、今度はイースター期間中の天気について調べる。参加者は関連ページを開き、自分の住む地域の週間天気予報をチェックする。参加者の学習ペースは様々であるが、図書館側も柔軟に対応している。

第3節 移民の学びを支える図書館として一必要とされる要件の検討

第1節では、エントレッセ図書館で開催されている各種イベントの開催状況を明らかにした。当館で1か月間に開催されるイベントは、音楽、ダンス、手工芸、瞑想など趣味や健康に関するものから、子ども向けのおはなし会、電子機器の使い方や放課後の宿題支

援、外国人のための語学講座、外国人と地域住民が知り合うためのイベント、日本やイタリアなど他の文化と触れ合うイベントなど実に多岐に渡っている。第2節では、その中でも移民であるロシア語話者の地域住民を対象とした「ロシア語による初心者のためのコンピューターとインターネットの使い方クラス」の参与観察結果を記した。第3節ではそれらを踏まえ、運営面と施設面という2つの側面から、公立図書館を移民の学習機関として活用していくために必要と考えられる移民プログラムの成立要件を抽出する。

1. 運営面における要件

(1) 外国人職員の積極的雇用

移民の参加という点に着目すると、イベントの実現には、やはり図書館が外国人職員を積極的に雇用していることがいくらか関係していると考えられる。実際のところ、外国人職員は館内における多文化イベント開催や利用者の対応に大きく貢献している。第2節で参与観察した、ロシア語による初心者のためのコンピューターとインターネットの使い方クラスは、エスポー市職員であるロシア人イリーナ先生がロシア語による授業展開が可能であることから実現しているものである。オルガ職員とアレクサンドラ職員もロシア語での対応が可能であるため、参加者の質問に迅速に対応することができる。エントレッセ図書館では、この他にも第1節の表1で示した通り、イタリア人職員によりイタリア料理教室が開催されている。昨年初の試みでこれが成功したことにより、日本料理、インド料理、ロシア料理教室が実現したという。特に日本料理教室は、日本人職員である坂田職員を中心に開催されており、イベント情報に掲載のある「おりがみワークショップ」というイベントも同じく坂田職員の貢献があって成り立っているイベントのひとつである。また、多言語対応が可能な外国人職員の存在は、イベント以外の面においても、それぞれの職員が自ら話すことのできる言語を用いて様々な質問に応じ、説明するなど利用者の助けとなっている。職員の名札には対応可能な言語にかかわる国旗のシールが貼られているため、利用者にとってもどの職員が自分の言語に対応可能かが一目瞭然である〔写真2〕。そして、先述した通り、図書館ではシフト制勤務を採用することにより、これら多様な背景を持った職員があらゆる時間帯に開催されるイベントに対応することが可能となるのである。

(2) 市民活動に対する図書館側の協力

表1で整理したように、エントレッセ図書館の移民や難民向けのイベントの中には、「一緒に読もうー女性のためのフィンランド語学習グループ」、「SPR 宿題クラブ」等、移民の教育支援に重点を置いた市民組織や民間団体によるものや、「インターナショナル・ストーリーカフェ」など、図書館と市民・民間共催のイベントも含まれている。移民や難民向けに限らず、イベント全体を通して全体29%にあたる共催を含めた7イベントが市民組織や民間団体により運営されていた。

フィンランドは市民活動が盛んな国である。国内で登録されている大小、様々な種類の協会(yhdistys)の総数は138,535に及ぶ³³。そのような中で、これらの市民、すなわち民間の協会、団体のいくつかが図書館でイベントを開催している。また、図書館主催のイベントにおいても、彼らはボランティアとしてパシラ図書館の音楽部門等を母体として独立

した図書館である Library 10を調査した千葉³⁴によると、同図書館で開かれるイベントのうち8割が市民の持ち込み企画であったという。パシラ図書館では、かつてフィンランド語のランゲージ・カフェに参加していたイタリア人男性が自らの専門を生かしてフィットネスのイベントを立ち上げ、現在も継続して開催されているという³⁵。今回、筆者は同じ市内のタピオラ図書館で難民を対象としたランゲージ・カフェも訪ねたが、その際にも参加者の一人が「図書館でアラビア語を教えたい」と図書館員に希望を述べ、その実現に向けて早速連絡先を尋ねていた。このようにフィンランドには、移民が主体性を持ってイベントに参加することのできる環境が備えられているのである。

そして、図書館もその会が営利目的でない限り、主催者に無料で場所を提供している。なお、エントレス図書館は多文化共生に向けて積極的な取り組みを行っている館であるが、多文化関係の予算という枠組みが存在しないことから、ランゲージ・カフェ等で提供される飲食物の費用は一般会計から拠出されている。

2. 施設面における要件

(1) 音楽、食を楽しむオープンスペースの存在

エントレッセ図書館館内におけるイベントの開催場所に注目してみると、表1での整理から分かるように、ジュークボックスで開かれているものが最も多かった。図書館の同じ敷地内の少し離れのような所にあるこの広い空間には、DJ設備のあるダンススペースの他、奥には厨房やドラムやギターの貸し出しが行われ、楽器が演奏できる小部屋もある〔写真3〕。毎回大盛況で100名程度の参加者があるダンスの会もジュークボックスで開かれており、各国からの移民である外国人職員による料理教室もこちらの厨房で開催されている〔写真4〕³⁶。厨房という施設は、移民である外国人職員に自国の料理を紹介するという活躍の場と、フィンランド人が料理を通して異文化に触れる機会を同時に提供しているのである。

図書館内で音楽をかけ、演奏する、若しくは料理を作るといった行為は、日本人の持つ、書籍やオーディオ類を借り、読書や勉強をするための静かな図書館という概念を覆す。フィンランドで2006年に示された「図書館発展プログラム2006-2010」には、図書館の新たな挑戦のひとつとして「出会いの場としての図書館」が挙げられており、そこには地域図書館の役割として、「全ての人にとってレクリエーションや自発的な学習のための楽しい空間となる、物理的な場、出会いの場を提供すること」と明記されている³⁷。フィンランドでは図書館で得られる知識というものをより包括的に捉えており、紙媒体等から個人的に得たものに限らず、人との出会いによってもたらされる知も同様に大切にしようという考え方がある。

このように館内には色々な設備が整えられており、それらは各種イベントにも生かされている。また、エントレッセ図書館では、書架や家具にキャスターが付いており、全て可動式となっている〔写真5〕。既存の設備に容易に変更を加えることにより、新たな空間を生み出すのである。移民とフィンランド人が親しく語り合うことを目的とする「インターナショナル・ストーリーカフェ」をはじめ、3つのイベントが開催されているエストラディというスペースはこのように館内のレイアウトを変えることで生じた空間である。ガラス張りのジュークボックスやオープンスペースであるエストラディのような場

所は、他の利用者から人目につきやすい。そのため、移民を対象としたイベントを開催している際も、図書館の他の利用者に彼らの存在が可視化されるのである。

(2) 最新機器の導入

また、フィンランドの公共図書館内にはパヤ (Paja) と呼ばれる、ミシン、ロックミシン、3Dプリンター、ラミネート機器、Tシャツプリンターなどを備えた一角がある〔写真6〕。利用者は基本無料でパヤにある様々な道具を使うことができる他、「手工芸クラブ」等のイベントを行う際にも利用されている。他にも、エントレッセ図書館では館内のゲームコーナーにゲーム機が備えられている。ゲーム機に関してはある程度普及していると考えられるが、例えば家にそれらがなくても親の収入に関わらず子どもたちは図書館で楽しむことができる³⁸。フィンランドの図書館法の第1章には、公共図書館が提供する図書館情報サービスの目的として、「市民が、個人の教養、知識や文化への関心、継続的な知識開発、個人的な技能や市民性、国際化、生涯学習を追求するための平等な機会を促進す



〔写真3〕



〔写真4〕



〔写真5〕



〔写真6〕

ること」が挙げられている³⁹。地域住民に先立って最新機器を率先して導入する背景には、図書館設備によって国民の間にある不平等を少しでも是正していこうという姿勢が窺われる。「ロシア語による初心者のためのコンピューターとインターネットの使い方クラス」で利用されているパソコンについても、当初はこの目的の下で図書館に導入された。最新機器の導入は、(1)に挙げた音楽、食を楽しむオープンスペースの存在と共に、フィンランド語はまだ十分に話すことができないが、読書以外の目的を持った移民の図書館利用を促すきっかけになると考えられる。

結 論

本論文では、フィンランド・エスポー市の公立図書館のひとつであるエントレッセ図書館において2016年3月に実施した参与観察並びにインタビュー調査結果に基づき、移民の学びを支える図書館として必要と考えられる要件を検討した。

第1節では、2016年9月の1か月間に図書館で開催されたイベントの実施状況を、対象者、開催曜日・頻度、開始時刻、場所、使用言語、主催団体の項目ごとに明らかにした。結果、1か月間に開かれている24のイベントのうち、移民を対象としたイベントが6つあることを見出した。また、その中には、ロシア語やエストニア語など移民たちの言語のみで開催されているイベントも含まれていた。第2節では、「ロシア語による初心者のためのコンピューターとインターネットの使い方クラス」における参与観察に基づき、当クラスの概要、授業内容を記した。第3節では、第1節と第2節の結果から、移民の学びを支えるプログラムを実施する図書館として必要と考えられる要件について運営面と施設面とに分けて検討した。そして、運営面では、外国人職員の積極的雇用、市民活動に対する図書館側の協力を、施設面では、音楽、食を楽しむオープンスペースの存在、最新機器の導入をそれぞれ見出した。

本論文で検討した通り、様々な設備を備えたフィンランドの公立図書館は、読書や個別学習の場に留まらず、人との出会いの場としても機能し、それらを知のひとつとして尊重している。定住して間もないフィンランド語に不自由を感じている移民にとっては、図書館における言語を介在としないイベントや、自分の話す言語で行われるイベントへの参加を通して、フィンランド社会と接することができる。また、その学びを運営面で支えているのが、図書館のフィンランド人職員だけでなく、彼らよりも早い段階でフィンランドに定住した移民や、また同国の一般市民による活動であった。

このように、フィンランドでは図書館が移民の学びにいくらか貢献している訳であるが、それには今回検討した図書館内部の事情だけでなく、外国人職員の雇用、社会・職場環境、生涯学習機関としての図書館の位置づけ、人口等国家規模、国民の英語の習得環境など様々な因子が複雑に絡み合っていると考えられる。今後は、地域における図書館と他の生涯学習機関の役割、外国人職員雇用に関する規程の詳細、成人移民が図書館等の生涯学習機関で学ぶまでのプロセス等、それらの因子の関係性についても考察していきたい。

〔引用文献・注〕

- 1 法務省、在留外国人統計 2016年6月末、
http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html
2016年11月19日閲覧。
- 2 山口源治郎「公共図書館と生涯学習」『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』
vol.4、2005年5月、225-229頁。
- 3 深井燿子「スウェーデンにおける移民・難民への公立図書館サービスー『平等・選択の
自由・協同』の外国人・少数民族政策のもとに」『阪南論集人文・自然科学編』26
(4)、1991年3月、41-51頁。
- 4 小林ソーデルマン淳子、吉田右子、和気尚美『読書を支えるスウェーデンの公共図書
館ー文化情報へのアクセスを保障する空間ー』新評論、2012年
- 5 吉田右子『デンマークのにぎやかな公共図書館ー平等・共有・セルフヘルプを実現す
る場所』新評論、2010年
- 6 和気尚美「デンマークの移民に対する公共図書館サービスーアクターの機能と関係に
着目して」『日本図書館情報学会誌』61(3)、2015年9月、135-151頁。
- 7 マグヌスセン矢部真美・吉田右子・和気尚美『文化を育むノルウェーの図書館ー物
語・ことば・知識が踊る空間』新評論、2013年
- 8 久野和子「フィンランドにおける『第三の場 (サードプレイス)』(third place) とし
ての図書館」『神戸女子大学文学部紀要』第49号、2016年3月、101-114頁。
- 9 西川馨『学力世界を支えるフィンランドの図書館』教育資料出版会、2008年
- 10 大橋裕太郎『「生涯学習としての情報教育」を支えるフィンランドの図書館の特徴』
『メディア教育研究』第6巻、第2号、2010年、1-13頁。
- 11 千葉浩之「教育先進国フィンランドの図書館に学ぶ学習支援」『大学図書館研究』
101、2014年12月、35-43頁。
- 12 桂啓壯「フィンランド図書館の教育への貢献」『人文社会科学論叢』宮城学院女子大
学、22号、2013年3月、1-7頁。
- 13 水野真奈美「IFLA ヘルシンキ大会へのおさそい(1)フィンランドの図書館事情ー公共
図書館についてー」『図書館雑誌』106(4)、2012年月4月、262頁。
- 14 福田誠治「IFLA ヘルシンキ大会へのおさそい(2)フィンランドの図書館」『図書館雑
誌』106(5)、2012年5月、324頁。
- 15 家城清美「IFLA ヘルシンキ大会へのおさそい(3)フィンランドの学校図書館」『図書
館雑誌』106(6)、2012年6月、412頁。
- 16 三浦太郎「IFLA ヘルシンキ大会と図書館員の国際交流」『図書館雑誌』106 (12)、
2012年12月、845-848頁。
- 17 山田伸枝「IFLA 多文化社会図書館サービス分科会報告」『図書館雑誌』106 (12)、
2012年12月、853頁。
- 18 HelMet, What is Helmet?, http://www.helmet.fi/en-US/Info/What_is_Helmet, 2016年
9月16日閲覧。
- 19 各自治体の人口統計は、Statistics Finland's PX-Web databases による。数字は全て2015
年12月31日時点。Population by Area, Population and increase of population and Sex,

- http://pxnet2.stat.fi/PXWeb/pxweb/en/StatFin/StatFin__vrm__vaerak/010_vaerak_tau_123.px/table/tableViewLayout1/?rxid=a9f2c886-2aa2-44a5-908b-8b245de21396, 2016年9月19日閲覧。
- 20 Aki Sakata-Henttonen 氏へのインタビュー調査より。
 - 21 Jasmin Lappalainen 氏へのインタビュー調査より。
 - 22 Entressen kirjasto, HelMet, http://www.helmet.fi/en-US/Libraries_and_services/Entresse_Library, 2016年10月2日閲覧。
 - 23 Espoon kaupunki, http://www.espoo.fi/en-US/Housing_and_environment/City_centres, 2016年9月19日。
 - 24 これについては、City of Espoo, Pocket Statistics, 2015, p.7に詳細があるが、右肩上がりに人口が増え続けている。
 - 25 City of Espoo, *op. cit.*, p.14.
 - 26 City of Espoo, *op. cit.*, p.12.
 - 27 City of Espoo, *op. cit.*, p.7.
 - 28 Taulukko 7. Väestön äidinkieli vuodenvaihteeaa 2013/14 ja 2014/15 in Arja Munter, Espoon Väestörakenne 2014/2015, Tietoisku 6/2015, p.8, Taulukko 7.Väestön äidinkieli vuodenvaihteeaa 2013/14 ja 2014/15.
 - 29 City of Espoo, Annual Report-Espoo, 2015, http://www.espoo.fi/materiaalit/Espoon_kaupunki/verkkolehti/Annualreport2015/, 2016年9月20日閲覧。
 - 30 HelMet, Tapahtumat, 1.9.2016-30.9.2016, Entressen Kirjasto, http://www.helmet.fi/fi-FI/Tapahtumat_ja_vinkit/Tapahtumat?s=entressen&es=1.9.2016&ee=30.9.2016, 2016年9月12日、21:50調べ。
 - 31 前掲、Sakata-Henttonen 氏。
 - 32 ビョルクランド・クリステル「フィンランド移民政策と里帰り移民ーインゲル・フィン人の事例からー」『国立民族学博物館調査報告』83、2009年3月、139-157頁。
 - 33 Finnish Patent and Registration Office, Statistics on associations and religious communities in Finland, <https://www.prh.fi/en/yhdistysrekisteri/statistics.html>, 2016年9月27日閲覧。
 - 34 前掲、千葉。
 - 35 ヘルシンキ市、パシラ (Pasila) 図書館への訪問調査 (2016年3月23日、15:00-16:00、パシラ図書館) より。
 - 36 前掲、Sakata-Henttonen 氏。
 - 37 Kirsti Kekki, *Library Development Program 2006-2010*, Ministry of Education and Culture, Finland, 2006, p.13.
 - 38 前掲、坂田氏。
 - 39 Library Act 904/1998, Finland.

論文内の写真はすべて著者撮影

〔巻末資料〕 エントレッセ図書館開催イベントの詳細 (2016年9月1日～30日)

エンター・アソシエーションによるシニアのためのITピアサポート会 (Enter ry tietotekniikan vertaistukea senioreille)
開催しているのは図書館ではなく、エンター・アソシエーション (Enter ry) という情報技術やその活用に興味を持つ退職者の市民団体である ¹ 。コンピューターの操作に関する、個人やカップルを対象としたガイドツアーが実施される。参加費は無料だが、可能であればパソコン持参が望ましい。今季は8月25日から開催されている。図書館では、このイベントの他にもIT関係の研修生が常時、パソコン、タブレット、スマートフォンのテクニカルサポートに対応している ² 。(毎週木曜、12:00-14:00)
MLL 家族カフェ (MLL Perhekahvila)
MLL とは、フィンランド国内に558の拠点をもち、91,000人の会員を擁する NGO「児童福祉のためのマンネルハイムリーグ (Mannerheimin Lastensuojeluliitto)」の略称である ³ 。この NGO は子どもや子を持つ家庭の幸福を促進することを目的としており、この催しを通して5歳以下の子どものおもちゃ交換会を行っている ⁴ 。参加費無料でクリスマスまで開催されている。(毎週金曜、10:00-12:00)
早起きさんの週刊ニュース (Aamuvirkkujen viikkokatsaus)
最近の時事問題について語り、意見交換をする会。(毎週月曜、9:00-10:00)
ステージダンス (Lavataanssit)
今季は8月から開催されているダンス教室。費用は無料、参加者はソフトドリンクを楽しみながら指導を受ける。開催予定とその日程については次の通り：ガイダンスとこれまでのおさらい (8/23)、ヒルダのワルツとルンバ (9/6)、フォックスとスローフォックス (9/20)、タンゴとチャチャ (10/4)、昔のタンゴとバグ (10/18)、クイックステップ、ジャイブとサンバ (11/1)、ルンバとハンパー (11/15)、マズルカ、ポルカ、サルサ (11/29)、これまでのおさらい、秋期のまとめ (12/13)。(隔週火曜、11:00-13:00)
手工芸クラブ (Käsityökerho Entikäs)
お茶や話を楽しみながら、手芸をする会。秋季のトピックは初回に決めるが、毎回違う課題に取り組む。なお、各回のトピックはクラブのブログで確認できるようになっている。イベント告知には、「手工芸についてあまりアイデアを持っていなくても、クラブに参加すれば道具も揃っており、何らかの手がかりを掴むことができる」とある。参加費は無料、事前登録は必要なく、遅刻早退も自由である。具体的には、ボタンを使ってネックレスやプレスレットを作る、毛糸の靴下を編んでホームレスの人に贈る、毛糸や布やボタンで花を作る、パターンカッターで布をトナカイの形に切り抜くといった活動をしている ⁵ 。(火曜隔週、17:00-19:45)
エントレッセ図書館ランゲージ・カフェ (Kielikahvila Entressen kirjastossa)
フィンランド語で自由に会話を楽しむイベントであり、移民の参加を想定している。フィンランド語の基礎は身に付けているものの、会話の練習を希望する主に外国出身者が参加する図書館主催イベント。参加費は無料で、コーヒーや紅茶が用意されている。(毎週火曜、17:30-19:30)
フィンランド語によるおはなし会 (Suomenkieliset satutunnit)
フィンランド語による子ども向けのおはなし会。9月28日はイタリアンウィークに合わせて、歌手とピアニストを迎え、イタリア音楽を採り入れた会となっている。メールによる事前予約が必要とされており、エスポー市の職員により、英語、ロシア語、ソマリ語、アラビア語で対応可となっている。(毎週水曜、10:00-、おはなしルーム)

<p>一緒に読もうー女性のためのフィンランド語学習グループ (Luetaan yhdessä -Suomen kielen opintoryhmä naisille)</p>
<p>移民女性を対象としたフィンランド語学習グループで、イベント告知には「フィンランド語を読み、書き、話しに来てください。初心者、上級者すべての人に開かれたグループです。フィンランド語の先生は皆女性で、無料で授業が受けられます」とある。大学女性協会 (Akateemiset naiset) が主催する、一緒に読もうネットワーク (Luetaan yhdessä-verkosto) が開催するイベントである。大学女性協会は1922年に設立された大卒女性による世界的なネットワークを持つ NGO である⁶。その中でも、一緒に読もうネットワークは移民女性の社会統合をサポートするボランティア活動で、2004年より移民の女性に対しフィンランド語の読み書きを国内各地で教えている。2007年に全国規模のものとなり、現在では600人の講師の下で2,900人以上の受講生が学んでいる⁷。(毎週水曜、10:15-11:45、ブルールーム)</p>
<p>親父のためのタンバリンクラブ (Old Man's Tambourine Club)</p>
<p>互いに会話をし、楽器の演奏を楽しむ会。図書館の主催のイベントで、参加費は無料、コーヒーが付く。(毎週木曜、16:00-19:30、ジュークボックス)</p>
<p>SPR 宿題クラブ (SPR-läskykerho)</p>
<p>赤十字のボランティアが放課後、学校に通う子どもたちの学校の宿題を助けるクラブ。クラブ自体はエントレッセ図書館以外でも行われており、他の図書館では、学習ヘルプ (LäskyHelppi) という名称で運営している。とりわけ、両親が手助けできない、学校の宿題やフィンランド語に困難を抱えている移民の子どもや若者を対象としたクラブである。エントレッセ図書館での開催ではないが、参加を希望する子どもの数が増えたため、2016年秋より木曜のクラスが増設された。そのため、現在、クラブではカウンセラーや教師の募集を行っている。応募条件には「プロの教師である必要はなく、来て、若者の声を聞き、その子に興味を持ち、励まし、モチベーションを与えてくれる人」を求めているとある⁸。(毎週水曜、17:00-18:30、ブルールーム)</p>
<p>女子のためのキャンディ・カフェ (Candy-kahvila tytöille)</p>
<p>1919年創設の市民団体、カリオラ・セツルメント (Kalliolan Nuoret ry) の活動の一環として行われている、ガールズハウスによるイベント。カリオラ・セツルメントは、成人教育、市民ボランティア活動、児童福祉、青少年育成活動、物質の誤使用に対するケア、刑事民事事件の調停、高齢者や障がい者へのサービスなどと多様な活動を行う組織である⁹。ガールズハウス自体は国内に7カ所あるが、このイベントはそのうちのエスポー・ガールズハウス (Espoon tyttöjen talo) によって開催されている。このイベントは若い女性たち (10~28歳までが対象とされる) が気軽に集まり、快適でありのままの姿で過ごせる環境を提供している¹⁰。エスポー市とフィンランド・スロットマシン協会 (Ray) が運営資金を拠出している¹¹。毎回のスケジュールとその開始時刻は、コーヒーショップ開店 (14:00-)、ゲストアーティストであるメアリー・A が登場 (14:30-)、指輪製作、タトゥー、ネイルのワークショップ (15:30-)、カフェ閉店 (18:00) となっている。(毎週金曜、14:00-18:00、ジュークボックス)</p>
<p>母親と赤ちゃんのためのエストニア語によるグループ (Eestikeelne emade-beebide vestlusrühm)</p>
<p>エストニア語で行われる子育て講座。参加者は全てエストニア語話者とされており、インターネット上のイベント告知も全てエストニア語で記載されている。参加費は無料で、回毎に次のテーマが設定されている (括弧内は開催日)：休みなく寝る赤ちゃん、良質な夜の眠りについて (9/19)、赤ちゃんのスケジュール、赤ちゃん和家人全体の予定表 (9/26)、出産後の家族との関係、赤ちゃんが家庭にいること (10/3)、なぜ赤ちゃんはそんなに泣くのか? それによってもたらされる苦悩 (10/10)、赤ちゃんにきゅうりを与えても大丈夫? 追加食材の検討 (10/17)、赤ちゃんはいつハイハイを始めるのか? 赤ちゃんの運動機能の発達 (10/24)、音楽サークル、ベビースイムなど子を持つ家庭へエスポー市が提供するサービス情報 (10/31)。</p>

<p>問い合わせ先がエスポー市結婚カウンセラーとなっていることから、市主催のイベントであることが理解できる。(毎週月曜、13:00-14:00、おはなしの部屋)</p>
<p>スウェーデン語によるおはなし会 (Sagostunder på svenska)</p>
<p>スウェーデン語で行われるおはなし会。この会に関する情報は、全てスウェーデン語で記載されている。(火曜隔週、3歳から5歳が9:30-10:00、5歳から6歳が10:15-10:45、おはなしの部屋)</p>
<p>ダンスの会 (Vapaat tanssit)</p>
<p>ダンスを踊るイベントで参加費は無料。(毎週火曜、11:00-13:00、ジュークボックス)</p>
<p>おりがみワークショップ (Origamipaja)</p>
<p>「おりがみワークショップ：おりがみ、きりがみ、紙のアートでリラックスしませんか。お一人でも、お子さんとでも、手ぶらで気軽におこしください」と日本語で記載されている。紙を使って、装飾、お花、動物の作成を行う。来て楽しむことが重視されており、予備知識は必要とされない。材料も持参する必要はなく、参加費も無料。(火曜隔週、17:30-19:00)</p>
<p>瞑想の会 (Ascension!)</p>
<p>イシャヤ (Ishayas) というアメリカ発祥の瞑想法を実践する団体と図書館の共催イベント。なお、イシャヤは宗教団体や思想団体ではなく、教義や信念体系などは持っていない¹²。(9月17日、14:00-16:00、ジュークボックス)</p>
<p>ロシア語による初心者のためのコンピューターとインターネットの使い方クラス (Компьютернаяпомощь нарусском языке –Tietokoneen käytön ja internetin alkeet venäjänkielisille)</p>
<p>このイベントに関する情報は、ロシア語とフィンランド語で掲載されている。募集の告知が「携帯電話やコンピューターの使い方で助けを必要としていますか?」との書き出しで始まるロシア語話者向けのイベント。今季は9月20日から12月13日まで開催。コンピューターに関する一般的な質問に加え、コンピューターによる書類作成やフィンランド語での情報検索の方法についても支援している。(毎週火曜、11:00-12:30、会議室)</p>
<p>病気の人や愛する人の記憶のためのワークショップシリーズ (Työpajasarja muistisairaille ja heidän läheisilleen)</p>
<p>認知症で記憶を失った、愛する家族への対応に関する4回シリーズのワークショップ。コピー付きで無料。エントレッセ図書館のイベント情報には詳細がないので、市のホームページにあるタピオラ図書館開催分を参考にすると、実際に手で行うことによって記憶を回復させる方法を大切にしているようである。ちなみに昨年タピオラで行われた各回のテーマは、第1回：ゲームとリズム (子どもの頃の遊び等を思い出す)、第2回：伝統的なおもちゃ (どのようなおもちゃで遊んでいたのかを回想し、実際に手で作成する)、第3回：日常の思い出 (大切な写真や小さな思い出の品を持参し、記憶を呼び戻すことへと繋げる)、第4回：クリスマス (クリスマスの雰囲気を感じ、共に歌う) となっていた¹³。なお、このイベントは、フィンランドおもちゃ博物館¹⁴、退職者協会¹⁵の活動の一環であるエラマ・カシラ (Elämää käsillä)¹⁶、高齢者の活動をサポートするプログラムであるエロイサ・イカ (Eloisa ikä)¹⁷、フィンランド・スロットマシン協会 (Ray)、フィンランドアルツハイマー協会 (Muistiluotsiasiantuntija) の活動の一部である「記憶回復専門家と支援ネットワーク (Muistiluotsiasiantuntija- ja tukikeskusverkosto)」が主催・協賛している。(9月19日、13:00-15:00、ジュークボックス)</p>
<p>ビートルズ回想 (The Beatles-vinyyliaikamatka)</p>
<p>1966年にビートルズがツアーを中止してから50年が経過した今年、様々な図書館 (エントレッ</p>

<p>セの他は、キベンラハティ、セロ、タピオラ、イソオメナ)で開催されている彼らのレコーディングやバンドの歴史に関するイベント。フィンランド国営放送 (YLE) と共にビートルズの長編番組に携わってきたハッリ・ナイマンを迎え、ビートルズの歌に浸り、参加者も自らの思い出についても語る。(9月22日、18:00-、エストラデー)</p>
<p>インターナショナル・ストーリーカフェ (Kansainvälinen tarinakahvila)</p>
<p>移民、難民がフィンランド人と知り合い、話題を共有するのを手助けするためのイベント。告知には「語ることは易しくて、楽しい！」とあり、積極的な参加を促している。他の参加者の話を聞くだけでなく、小グループに分かれて自ら話をし、時には音楽や話のプロによる読み聞かせもある。出演者情報には、読み聞かせ担当、音楽家、司会者の名前が明記されている。イベント自体は英語で行われるが、言語能力が充分でない場合は聞くだけの参加も可能である。無料だが、場所に限りがあるので事前予約が必要。秋季はエントレッセ図書館の他、セロ図書館でも開催されている。なお、このイベントはアルバ・ストーリー・シェアリング・ザ・ユニバース・プロジェクト (AlbaSF Story Sharing the Universe Project) とエントレッセ図書館の共催であり、資金はエスポー市が出資している。このプロジェクトは自体は、ヘルシンキにある4つの劇場の協力会であるユニベルスム (Universum) によって計画、運営されているものであり、ユニベルスムはフィンランド人と移民が話すことを通してお互いを知ることをサポートする活動を推進している¹⁸。(9月24日、14:00-17:00、エストラデー)</p>
<p>ムクスキノ (Muksukino)</p>
<p>子どものための映画上映会。秋のテーマは、昆虫や森の生き物など、自然と冒険の映画。全4回開催される。(毎月最終月曜、10:00-12:00、ブルールーム)</p>
<p>イタリア料理ワークショップ (Italian ruokapaja)</p>
<p>図書館が9月26日から10月1日までイタリアンウィークを開催することに合わせて行われる、季節の野菜でイタリア料理を作るイベント。12人という人数制限があり、事前申込みが必要。(9月26日、17:00-20:00、ジュークボックス)</p>
<p>イタリアサッカーのお話 (Pyhä peli-Italian jalkapallon tarina)</p>
<p>今年フィンランドで出版された『神聖な試合ーイタリアのサッカー物語』の作者であるエサ・マキヤラヴィと、イタリア通で自転車やプロサッカーのコメンテーターとしてテレビに出演してきたユッカ・パッカネンによる講演会。(9月28日、18:00-19:00、エストラデー)</p>
<p>イタリアのタベとナポリの音楽 (Italialainen ilta-Napolilaisia lauluja)</p>
<p>イタリアンウィークに関わる、ナポリの歌とイタリア料理を楽しむイベント。歌手とピアニストが出演。(9月27日、18:00-19:00、エストラデー)</p>

[巻末資料]

- 1 Enter, <http://www.entersenir.fi/>, 2016年9月14日閲覧。
- 2 前掲、Sakata-Henttonen 氏。
- 3 Mannerheimin Lastensuojeluliitto, Etusiv in English, <http://www.mll.fi/en/>, 2016年9月14日閲覧。
- 4 Mannerheimin Lastensuojeluliitto, Keski-Espoon yhdistys, Perhekahvila Entresse, <http://keski-espoo.mll.fi/perhekahvila-entresse/>, 2016年9月14日閲覧。
- 5 Käsiyökerho Entikäs, <http://entikas13.blogspot.jp/>, 2016年9月14日閲覧。
- 6 Akateemiset naiset, Etusivu in English, <http://akateemisetnaiset.fi/in-english/>, 2016年9月14日閲覧。

- 7 Luetaan yhdessä, <http://www.luetaanyhdessa.fi/>, 2016年9月14日閲覧。
- 8 Punainen Risti, Red Net, LäksyHelppi, <https://rednet.punainenristi.fi/node/29164>, 2016年9月25日閲覧。
- 9 Kailliolan Nuoret ry, in English, <http://www.kalliola.fi/in-english/>, 2016年9月15日閲覧。
- 10 Espoon tyttöjen talo, <http://espoontyttojentalo.fi/>, 2016年9月15日閲覧。
- 11 Ray, <http://www2.ray.fi/en/ray/about-us>, 2016年9月15日閲覧。
- 12 イシャヤ・アセンション, <http://ishaya-japan.com/>, 2016年9月15日閲覧。
- 13 Espoon Kaupunki, Käsinkosketeltavat muistot-työpajasarja muistisairaille ja heidän läheisilleen, <http://www.espoo.fi/fi-FI/haku?n=23&d=1&s=ty%c3%b6pajasarja+muistisairaille+ja+heid%c3%a4n+1%c3%a4heisilleen>, 2016年9月24日閲覧。
- 14 Lelumuseo Hevosenkenkä, <http://lelumuseohevosenkenka.fi/services>, 2016年9月15日閲覧。
- 15 Eläkeliitto, <http://www.elakeliitto.fi/etusivu/>, 2016年9月15日閲覧。
- 16 Elämää, käsillä, <http://www.elakeliitto.fi/toiminta/apunen-auttava+vapaaehtoistoiminta/elamaa+kasilla/>, 2016年9月15日閲覧。
- 17 Eloisa ikä, <http://www.eloisaika.fi/>, 2016年9月14日閲覧。
Muistiluotsi-asiantuntija-ja tukikeskusverkosto,
<http://www.muistiliitto.fi/fi/muistiliitto/tietoa-muistiliitosta/toimita/kehittamistoiminta/muistiluotsi/>, 2016年9月15日閲覧。
- 18 Universum, Story sharing universum, <http://universum.fi/universum/story-sharing-universum/>, 2016年9月16日閲覧。

Received : October, 4, 2016

Revision received : November, 25, 2016

Accepted : December. 9, 2016